

# ス パ イ ス

田  
端

ガ  
リ

【人物一覧表】

木田 樹美子（25）

彼氏

元カレ

木田 樹美子（25）

○ 電車・内

満員電車の車内。

木田美子（25）、人に押しつぶされそうになりながら、ふと角に立っているカツプルを見る。

カツプルは頬を突いたりし、いやついているが、女性の顔は絶妙に見えない。美子、イライラを隠すように視線をずらし、広告を見る。

○ 居酒屋・夜

美子「満員電車をお前らのスペースにするな！」

と、力強くグラスを置く。

美子の正面に座っている井上樹梨（25）。

樹梨「今度は何？」  
美子「満員電車の角。あの一番いいところあるでしょ？」

樹梨「寄つかることできる場所ね。」

美子「あそこでいちやついているカツブルがいたのよ。信じられない。私あいうの本当に無理。」

樹梨「ふーん。」

美子「え、ムカつかない? 話聞いただけでも。」

樹梨「別に話聞いただけだからムカつかない。」

美子「そっか……多分、あの子たちはさ、密室だと勘違いしているんだよ。」

樹梨「勘違いしないでしょ。人いっぱいいるんだから。」

美子「逆だよ。人がいっぱいいると人が壁にしか見えないんだよ。角に立ち、彼氏が壁となり彼女を守る。密着する二人はもう周りなんて見えない。頬を突き、頭をなで、

最終的には……」

樹梨「チューしてたの?」

美子「してなかつた。」

樹梨「してないんかい。」

美子「いや、私がすぐ降りたからその後が見

れなかつただけで、多分してたねあの後。

彼氏がさりげなくチユツと。」

樹梨「私、妄想の話なら聞かないよ。」

美子「ごめんごめん。でもむかついちやつて  
さ。私、夜勤に向かう途中だつたから。」

樹梨「あー……」

美子「私は土曜日の15時から次の日の9時  
まで仕事だつていうのに、あの子たちはこ  
れから二人で街へ行き、ディナーを共にし、  
夜景の見えるところで逆円錐の取つ手が細  
いグラスでお酒を飲むのかなつて。」

樹梨「オリーブ入つたやつね。」

美子「そう。で、彼女が聞くんだよ。（ぶつた  
声で）このオリーブって食べるの？（声を  
低く）ああ、このオリーブはね。」

と、オリーブを食べるジエスチャ―を  
する。

美子「（声を低く）このオリーブは食べれるん  
だよ。（ぶつた声で）ちよつと！私のオリー  
ブ食べないでよ！アハハ！アハハ！」

樹梨 「一方、美子は？」  
美子 「一食250円の手作り手抜き冷凍弁当をレンジでチンして。23時30分。600ワットで5分。待っている間、広告に流れてくる胡散臭いゲームを無心でする。」  
樹梨 「ホテルマンも大変だね。」  
美子 「私の人生。こんなにうまくいかないものかね。愛に飢えてるわ。」  
樹梨 「いや、美子彼氏いるじやん。」  
美子 「：：」  
と、机に突つ伏す。  
樹梨 「え、別れたの？」  
美子 「ん。」  
樹梨 「いつ？」  
美子 「一昨日。」  
樹梨 「なんで。」  
美子 「面倒くさいって。」  
樹梨 「何がさ。」  
美子 、顔を上げ、  
美子 「家事への口出し、服装への口出し、デ

ート先での口出し、そして……」

樹梨「そして？」

美子「話が長い。」

樹梨「なにもわかつてないじやん。話長いのが美子じやん。」

美子「付き合う前は自我を押ししつぶしていたもので……」

樹梨「清楚系だつて言われたつて喜んでたもんね。そういうことだ。嘘ついてたんだ。」

美子「嘘。嘘か。そうか私嘘ついてたのか。」

樹梨「うん。悪い嘘だとは思わないけどね。」

美子「結果別れてるならこれは悪い嘘じやない？」

樹梨「結果が悪かっただけで全部がダメなの？このままうまくいっていたなら、それは良い嘘になつたでしょ？多分。」

美子「そうかな？」

樹梨「多分。」

美子「無責任だな。」

樹梨「美子の問題だもん。私がどうこう言う

問題じゃない。」

美子「そうだけど……」

樹梨「ま、私はそんな嘘は絶対につかないけどね。」

美子「つくでしょ樹梨も。」

樹梨「美子ほどはつかないよ。美子ほどは。」

美子「私、そんなに嘘ついてる？」

樹梨「さっきも嘘ついてたよ。」

美子「え、ついてないよ。」

樹梨「満員電車。」

美子「え？」

樹梨「してたよ。角で。スペース。あんたが付き合いたての頃。」

○（回想）電車・内

樹梨、満員電車のなか座り、本を読む。ふと顔を上げると、角に元カレに壁になつてもらっている美子を見つける。

樹梨「（小声で）美子……」

美子、元カレに頬を突かれたり、頭を

なでられたりし、最終的に隠れるよう

にキスをする。

樹梨、ニヤニヤしながらコソコソと力  
メラを向けている。

### ○居酒屋・夜

樹梨、隠し撮った動画を美子に見せる。

美子「え、え、え？」

樹梨「めっちゃしてんじやん。スパイズ。」

美子「いやいやいや、いたの？ そんでもなん

撮つてるの？ 盗撮！」

樹梨「友達ならいいでしょ。将来、美子の結婚式の動画とかで使えるかなって。それより見てよ。この美子の顔。」

美子「結婚式にこんな生々しい映像流さないでしょ。別れたし！ あと見ないで！」

と、樹梨からスマホを奪おうとする。

樹梨「やめてよ！ 私が楽しんでるの！」

と、美子から取られないようスマホを後ろに隠す。

樹梨「で？どうだつた？」

美子「何がよ。」

樹梨「周りが壁に見えた？」

美子「うるさい。」

樹梨「さりげなくチュツとした？」

美子「うるさい！」

樹梨「オリーブ食べられた？」

美子「食べられてない！夜景も見てない！そもそもそんなところ連れて行ってくれなかつた！」

樹梨「……ま、美子には円錐より取っ手がついた円柱のグラスが似合うよ。」

美子、お酒を一気に飲み干し、  
すみません！ハイボール一つ！  
と、店員に注文する。

樹梨「でもさ、楽しいよね。二人だけの世界つて。」

美子「ま、そのときはね。周りからどう思われるかなんて考えないもんね。」

樹梨 「それだけでいいよね。」

美子 「そうね……」

樹梨 「じゃあ許せるね。今日の二人も。」

美子 「うーん……どうしようかな……」

樹梨 「許してあげなよ。」

美子 「なんで許させようとするのよ。」

樹梨 「だつて、ずっと恨んでいる人が多いよ  
り、許してあげた人が多い方がよくない？」

美子 「そうだけどさ……」

店員 「お待たせしました。ハイボールです！」

と、美子の前にハイボールが置かれる。<sup>9</sup>

美子 「ありがとうございます！」

と、ぐびぐびとハイボールを飲み、

美子 「うーん……いいや！許してやるか！」

樹梨 「いいね！さすが美子だ！」

美子 「その代わり、今日は飲むぞ！」

樹梨 「お供します！美子様！」

と美子と樹梨、乾杯をする。

美子、列に並び、電車を待つ。

電車が到着し扉が開き、満員電車の中に無理やり入る。

樹梨、彼氏と角にいるが美子に気づかない。

樹梨、彼氏といちやつき始める。

視線を感じ、その方向を見るとイライラして広告を見ている美子を見つける。

樹梨「あ⋮⋮」

彼氏「どうしたの？」

樹梨「友達いるかも⋮⋮」

彼氏「まじ？」

と、彼氏、いちやつき続ける。

樹梨「ちよつと⋮⋮」

彼氏「いいじやん。大丈夫でしょ？」

樹梨「⋮⋮まあ、大丈夫か。」

と、樹梨もいちやつき始める。